

〔75〕新国立劇場バレエ『こうもり』他

レパートリー、ソリスト陣も充実

2006年6月10日 東京新聞 夕刊

この一、二年、新国立劇場バレエがとても面白くなってきた。

一九九七年に開場して以来、プティパ作品を中心に着実にレパートリーを増やしてきたが、今やついに古典の主だったものはほぼ品揃えが完了したと言っている状態だ。またダンサーのテクニクも目覚ましく水準を上げている。とくに群舞の美しさ、コントロールの良さは抜群で、そこそこの外来バレエ団を観て、内心うちのほうが上手だなと思うことも珍しくない。

だがバレエというのは日々、時代とともに前進していくもの。だからこそ四百年の歴史を経てなお新鮮味を失わないでいるものなのだ。古典だけやっていけばいいというわけにはいかない。スタートから十年足らずの歩みを評価しながらも、私が新国立バレエに対して一抹懐疑的だったのは、レパートリーもスタイルも時代遅れの古めかしいものに固まってしまうのではないかと懼れたからだ。

だがダンサーたちは鮮やかに今という時代

〔75〕新国立劇場バレエ『こうもり』他

レパートリー、ソリスト陣も充実

2006年6月10日 東京新聞 夕刊

を表現する力を持っているようだ。そしてそれを折々の現代バレエで証明している。新国立バレエが面白くなってきたというのは、まさにそのことである。

たとえば昨年（注・二〇〇五年）十月初旬の『カルミナ・ブラーナ』。イギリスの振付家ピントレーの作品はいつもひねったユーモアと深い社会批判を含んでいて、説得力のある表現に持っていくのがとても難しいはずなのだが、主演の湯川麻美子も脇の吉本泰久も借り物でない演技で光を放っていた。

今年三月の「ナチョ・ドゥアトの世界」も後々、熱のこもった話題を提供した公演だった。スペインの気鋭の振付家ドゥアトの作品は南ヨーロッパ独特の土着的な白いが濃厚で、古典バレエの優雅さとはかなり異質だ。大ぶりの体遣いや重心移動、猛スピードで走り抜け床に倒れ込むなど過激な動きがあり、こなし切るのは簡単でない。しかし、再演の『ジャルデイ・タンカート（閉ざされた庭）』では厚木三杏みあが、また新しく挑んだ『ボル・ヴォ

〔75〕新国立劇場バレエ『こうもり』他

レパートリー、ソリスト陣も充実

2006年6月10日 東京新聞 夕刊

ス・ムエロ』では遠藤睦子が、それを自身の表現にして確かな存在感を見せた。いまや新国立バレエには、豊かな内面性を備えたソリスト陣が居並んでいるのである。

最近ではローラン・プティ振付の『こうもり』再演がよかった。これはエレガントで柔らかな物腰の真忠久美子のベラがはまり役である。また周囲の個性的な人物たちが作品をよく消化し、伸び伸びと余裕を感じさせる演技で、舞台の面白味は初演より数段上だった。

予想外の掘り出しものは、友人ウルリック役をルイジ・ボニーノの代役で踊った小嶋直也である。もともとテクニック抜群の古典的な王子役で評価されていたが、こういうクセのある狂言回しの役が巧いとは知らなかった。

俊敏な脚さばきも見事だが、それよりコミカルで哀愁もある役作りがツボにはまっている。厚みのある準主役や脇役要員のいることは大バレエ団の屋台骨。いまだ歴史の浅い新国立バレエ団も、こうしたアーティストが揃うことで年代の艶が出てくるにちがいない。

〔75〕新国立劇場バレエ『こうもり』他

レパトリリー、ソリスト陣も充実

2006年6月10日 東京新聞 夕刊

新人の登用でも、新国立バレエは果敢である。毎回、誰かしら新人が主演するので、チェックが大変だが楽しみも大きい。近いところでは六月『ジゼル』の本島美和が注目株だ。

バレエ・カンパニーを築くのは、端で思うほど簡単な事業ではない。ヨーロッパ諸国の例を見ても、まずはバレエが根づいて土台を築き、そのうえで固有のレパトリリーとスタイルを作り上げるのに少なくとも百年から五十年は必要な大仕事である。それも、国家レベルの強力なサポートがあつての話だ。それを思えば日本のバレエも新国立バレエも決して遅い歩みではないのだけれど、しかしバレエを愛する者の人情として、一日も早い成長を願いたくなる。

有効な策としては、たとえ非常勤でも短期でもいいからヨーロッパの最前線で活躍している人を芸術監督に迎えて、振付と指導をゆだねること。また、海外公演で欧米の観客の視線を浴びて更に芸術を磨くことなどが考えられるだろう。そうした経験はバレエ団とア

[75] 新国立劇場バレエ『こうもり』他

レパートリー、ソリスト陣も充実

2006年6月10日 東京新聞 夕刊

ーテイストにとって、またとない栄養になるはずである。

そのためにも長い視野で、外国のバレエ団にない固有のレパートリーを貯えることをなおざりにしないでほしい。経済的な面から消極的になりがちな運営部と、とかく日本人の創作には冷淡な批評家にも、いま一度、考えを改めてもらいたいものである。